

“お母さんの田舎食堂”が変えていく、山間・過疎集落「350m の峠道」
 持続可能な山あいへ、どんつきの食堂が担う2つの役割

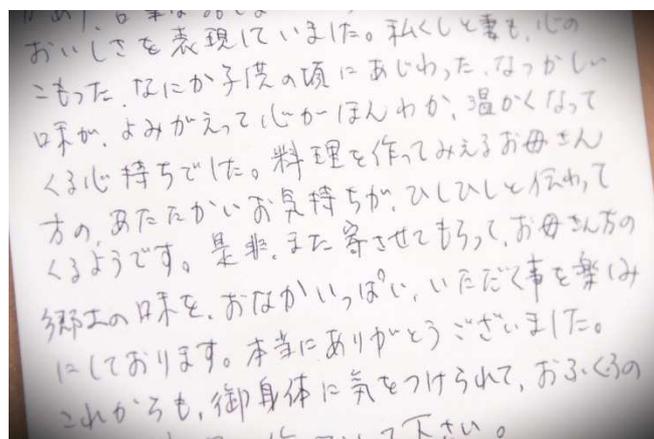


「舟伏の里へ おんせえよお～」で提供される「舟伏の里 ランチ」

■この10年で変わってきた峠道の風景

かご盛りの小鉢には、茄子のフライやごぼうの胡麻和え。そして、季節野菜の天ぷらやまぜご飯、自家製赤みそのおみそ汁が並ぶ。岐阜県山形市神崎の食堂「舟伏の里へ おんせえよお～」でふるまわれる、田舎ならではのちそうだ。

「素朴で手作りのランチ、とても美味しくいただきました」「なつかしい味がよみがえって心がほんわか、温かくなってくる心持ちでした」。食堂に置かれたノートには、県内外から訪れたお客さんたちのメッセージが記されている。



ノートに記されたお客さんからのメッセージ

この食堂は、過疎化が進む山あいにある。曲がりくねった峠道の道沿いだ。その峠道も、あと 10 キロも進めば行き止まりになる。どんつきの、何か目的がなければ偶然立ち寄ることのない場所に、この食堂は位置する。

食堂がオープンしたのは、2013 年 10 月だった。それから 10 年以上が経ち、この峠道の風景は少し変わってきている。食堂から約 350m の間に、ベトナムコーヒーを出すカフェができ、川のせせらぎが届くコワーキングスペースができ、古民家を改装した民宿ができた。

山あいの集落に「食堂がある」ということは、どんな意義があるのか。過疎が進む地域にとって、この食堂はどんな役割を担っているのか。「おんせえよお〜」の奮闘から考えた。

■ 廃校を活用した食堂の誕生



地域を流れる神崎川。夏休み中はキャンプ客のにぎやかな声が聞こえる

「おんせえよお〜」は、1997 年に閉校した旧北山小学校の廃校舎を活用して誕生した。地域の活性化と存続を目指し、山口市出身の山口晋一さん（42、年齢は取材時）と、三島広子さん（77）ら集落のお母さんたちが中心となって立ち上げた。調理はお母さんたちが担い、管理部門を山口さんが受け持つというのが主な役割分担だ。

「みんなでここに集まって、ワイワイガヤガヤ作業できることが一番」と三島さんは言う。狙いとした活性化の中身の一つには、地域のお母さんたちが活躍できる場所をつくりたい

ということがあった。また、料理に使う食材は近くの農家さんや地元の移動スーパーを中心に調達し、地域経済を回すことにも一役買っている。

立ち上げ時は国の補助事業を活用したが、その後は食堂の売上をもとに運営している。金土日みの営業だが、新型コロナウイルス感染症の蔓延が続いていた 2021 年でも、年間約 4200 食を提供した。お母さんたちの報酬は、毎月の利益を分配する形で支払われている。

■ どんつきの集落にできた間口の広い目的地

そんな「おんせえよお〜」が果たしている役割の 1 つは、地域外の人たちが立ち寄れる場になっているということだ。

集落の農作業時など地域内の人たちが利用することもあるが、お客さんの多くは地域外からやってくる。三島さんによれば、「おふくろに昔の郷土料理を食べさせてくれて連れてきた」という親子がきたり、若い女性客が連れ立ってきたりすることも珍しくないという。どんつきの集落において、この場所を訪れる目的地としての機能を果たしている。



黒板に貼り出された「おんせえよお〜」のお品書き

それは、この地域で生まれ育って、いまは離れて暮らす人たちにとっても同じだ。食堂のノートには「廃校はさびしいですが、このように続けて食堂をやっていただきうれしく思います」というメッセージも記されていた。

山口さんは「地元を離れた人たちが、また戻ってこられる場所がこれまでなかった。食堂という間口の広い場所だからこそ、いろんな人が立ち寄れる場所になっている」と話す。

■「歩いて楽しめる峠の集落」、その最初の一步

「おんせえよお〜」がこの10年超で果たした役割はもう1つある。過疎が深刻な峠の集落を「歩いて楽しめる集落」へと変えつつあるということだ。

食堂から峠道を5分上った先に、カフェ「Phin and Bean」はある。オーナーの河口準さんが、自らが生まれ育った自宅の商店をDIYで改装し、2019年にオープンした。河口さんは東南アジアを旅することが好きで、このカフェでもベトナムコーヒーを出す。夜はバーのようにお酒も楽しめる。「ゆったりとチル（※くつろげる）できる」居場所だ。

翌2020年には、コワーキング施設「神崎よってちょ」ができた。山県市地域おこし協力隊の河合祐樹さんが運営を担う。そして2021年には、山口さん自らが運営する形で民宿「水音」がオープンした。



古民家を改装したコワーキング施設「神崎よってちょ」

「よってちょ」も「水音」も、食堂からカフェまでの約350mの間に位置する。食べる、くつろぐ、働く、泊まるという要素がそろった「山間・過疎集落350mの峠道」だ。何か「ポツンと」ある状態から脱皮し、エリアとしてのおもしろみが増している。

2013年にオープンし、地理的不利にもかかわらず独自の魅力で運営を続けてきた「おんせえよお〜」は、結果的に、そんな峠道を形作る皮切り役を果たしたと言える。

■持続可能な集落へ、カギ握る食堂の存続

とはいえこの峠道は、現時点で、決して地方創生のサクセスストーリーになりきっているわけではない。地域の子どもは数人というところまで減少している。日々の買い物、子育て環境、働き口、病院のことと不利な条件を挙げればキリがない。それでも、地域のプレーヤーたちによる10年超の踏ん張りが、目に見える変化をもたらしてきたということがひしひしと伝わってくる。

2024年、「おんせえよお〜」がオープン以来拠点としてきた旧北山小学校の廃校舎が、老朽化のため使えなくなってしまった。いまは、近くの公民館で仮営業している。次年度からは、コワーキング施設「よってちょ」を改装して営業する方針で、山口さんは資金調達のクラウドファンディングを実施した。

©READYFOR「長年愛された田舎食堂の移転！ 地域の未来を守るプロジェクト」
<https://readyfor.jp/projects/onseiyo>



食堂の移転存続に向けた寄付を呼び掛けるチラシ

地域外の人たちの目的地となり、エリアとしての魅力を高める。そんな役割を果たす「おんせえよお〜」の存続は、集落の今後の持続可能性を大きく左右している。

(注)「おんせえよお〜」は「いらっしやい」という意味です。